カトリック 仙台教区報

No.250　2023年6月11日

発行：カトリック仙台司教区
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel.(022)222-7371 Fax.(022)222-7378
発行責任：仙台教区広報委員会
URL http://sendai.catholic.jp/

2023年4月29日（土･祝）、髙木健太郎助祭の司祭叙階式が元寺小路教会大聖堂で執り行われました。
仙台教区にとって17年ぶりとなる、新しい司祭誕生の喜びと共に感謝の祈りがささげられました。

叙階式ミサ

午前中に行われた「召命の集い in 仙台」に引き続き、仙台教区各地のみならず、東京大司教区の秋津教会から参加した子どもたちも白い侍者服に着かえ、緊張した面持ちで両手を合わせて行列が始まりました。40人以上の子どもたちが、「新しい歌を主に歌え」と響きわたる中を聖堂に入堂してきました。

続いて、司祭団の入堂、最後に髙木健太郎助祭に続き、幸田和生司教、平賀徹夫司教、ガクタン エドガル司教が入堂し、祭壇上に整列し、ミサが始まりました。

コロナ禍が始まり、聖堂の参加者も入場制限が行われ、パイプオルガンの音も消え、聖歌も歌われることがなかった約３年あまりを過ごした参列者は、パイプオルガンが鳴り響き、入祭の歌に始まり、いつくしみの賛歌、栄光の賛歌が歌われると、大聖堂に集まっていた400人以上の人が、叙階の喜びと聖歌が歌える喜びを顔いっぱいに表していました。

第１朗読　テサロニケの信徒への手紙5:4－18を金建さんが朗読。

答唱詩編、アレルヤ唱が歌われた後、福音朗読マルコ1:16－20がイエズス会の渡辺徹郎助祭によって朗読されました。

続いて、叙階の儀に入りました。

神学生時代の恩師マルコ神父、高橋昌神父と

候補者の選出

ガクタン司教は、祭壇前に置かれた席に着き、佐藤修神父が、「司祭に叙階される人は前に出てください」と髙木健太郎助祭を呼び出しました。

呼び出した司祭と司教とは、候補者が司祭にふさわしい人かを確認し、司教は「主なる神とわたしたちの救い主イエス・キリストの助けによって、この兄弟を、司祭団に加えることにいたします」と答え、参列者は「神に感謝」と唱え拍手が沸き起こりました。

説　教

ガクタン エドガル司教は、次のように説教をしました。

髙木助祭のご親戚や友人の皆様、養成担当の皆様、教区民の皆さん、兄弟である司祭の皆さん。

17年ぶりの仙台教区で奉仕する新司祭の叙階で、私たちは大きな喜びに満たされています。髙木神父の誕生は教会全体の喜びと希望です。このことを神に感謝と賛美をささげましょう。先ほど福音朗読をしてくださったのは、仙台教区の元寺小路教会出身で、イエズス会に入り、今年の３月 11 日に助祭叙階を受けた渡辺徹郎助祭です。

司祭団をご覧ください。いろいろな国籍の司祭や教区の司祭がいます。普遍教会を表しています。

ある司教は、2011 年に着座をしたとき、次のことを言ったそうです。

「教区設立 100 年を迎えるまでに、10人の司祭が誕生するように祈りましょう」と。そして、今年10人目の司祭が誕生したそうです。その10人目の司祭は、髙木助祭の同級生です。この教区は、広島教区なのですが、前田万葉枢機卿が、まだ広島の司教だったときのことです。私は、前田枢機卿の真似ではありませんが、仙台教区設立 100 年に当たる2036 年までに、11人の司祭の誕生を喜びと希望をもって迎えたいと願っています。

喜びと希望を抱えながら、間もなく司祭団に加えられる髙木助祭が、教会の中でどのような奉仕の務めを行うために司祭に叙階されるのか、ともに考えてみましょう。

イエス・キリストは御父から遣わされましたが、ご自身も使徒たちを世に遣わし、彼らとその後継者である司教たちをとおして、師であり、祭司であり、牧者であるご自分の務めを引き続き果たしていくようにされたのです。

司祭たちは司教団の協力者として立てられ、祭司の務めによって司教と結ばれて、神の民に奉仕するように召されています。

この兄弟は、十分に考えたうえで、今、司祭団の中で祭司職を果たすために叙階されようとしています。それは、師であり、祭司であり、牧者であるキリストに仕えるためであり、キリストの奉仕職によって、そのからだである教会は、神の民、聖なる神殿として築かれ、成長していきます。

この方は、福音を述べ伝え、神の民を司牧し、とくに主の奉献による神への礼拝を司式するために、永遠の大祭司キリストに似た者とされ、司教の祭司職に結ばれて、あたらしい契約の真の祭司として聖別されます。

司祭に叙階される髙木健太郎さん、あなたは師であるキリストにおいて、司祭として教え導くという聖なる務めに携わる者となります。自分自身が喜びをもって受け入れた神のことばを、すべての人に分け与えてください。

あなたの教えが神の民の糧となり、日々の行いがキリストを信じる人々の喜びとなって、ことばと模範をとおして、神の家である教会を築いてください。

また、あなたはキリストにおいて、人々を聖なる者とする務めを果たす者となります。この奉仕職によって、信者の霊的奉献は、キリストの奉献に結ばれて完成されます。キリストの奉献は、あなたの手をとおして信者とともに祭壇の上で、秘跡として祭儀のうちにささげられるのです。ですから、自分が行うことをわきまえ、それを生活の中で生かし、主の死と復活の神秘を祝う者として、自分自身あらゆる悪に対しては死んだ者となり、新しいいのちのうちに歩むよう努力してください。

あなたは、洗礼によって人々を神の民に加え、ゆるしの秘跡によってキリストと教会の名のもとに罪をゆるし、聖なる油によって病者を助け、聖なる儀式を司式します。また、神の民と全世界のために、感謝と願いをこめて、日々定められた賛美の祈りをささげます。

こうして奉仕の務めを果たすとき、あなたは自分が神に仕える者として人々の中から召され、人々のために立てられたということを思い起こしてください。そして、自分のことではなくキリストのことを考えて、永遠の祭司キリストの務めを、まことの愛のうちに、喜びをもってはたしてください。

最後に、頭であり牧者であるキリストの務めをそれぞれの立場で果たし、司教と心を合わせ、司教に従って、信者たちが一つの家族となるよう努力してください。こうして信者たちを、キリストによって、聖霊のうちに、父である神のもとへ導くことができるのです。そして、仕えられるためではなく、仕えるために来られ、失われていたものを探し求めて救いに導くために来られた、よい牧者キリストにならって生活してください。

説教が終わり、司教は祭壇前の席につき、叙階の儀が続けられました。

受階者の約束

司教は、髙木助祭にこれから与えられる司祭の務めを受け入れる決意があるかを表明するように促す問答が行われました。

「司教団のよい協力者となって、司祭団の一員として与えられた祭司としての務めをたえず果たしますか」

「福音をのべ伝え、カトリックの信仰を表すことによって、神の言葉に奉仕する務めを誠実に果たしますか」

「神を賛美し信じる民を導くために、キリストの秘義、とくに感謝の祭儀とゆるしの秘跡を、教会の伝統に従って敬虔に正しく執り行いますか」

「たえず祈るようにとの主のご命令に従い、自分にゆだねられた民のために、私たちとともに神の憐れみを祈りますか」

「教会共同体の助けのもとに、貧しい人、苦しむ人、助けを必要とするすべてのひとに、主の名において、神のいつくしみを示しますか」

「司教とのきずなの中で、尊敬の心をもって司教に従うことを約束しますか」

「わたしたちのためにご自分を清いささげものとして、御父にささげた大祭司キリストに日ごとに固く結ばれ、キリストとともに自分自身を、人々の救いのために神にささげますか」

この一つ一つの問いは、「あなたは、」と問われており、これに「はい、果たします」とか、「はい、行います」とか「はい、祈ります」などと答えていく、司祭職の務めがいかに非常に重い責任を負わせるものかを、聴くものとしても痛感し、神学校生活の厳しさ、真剣さを感じさせるものでした。

司教は「あなたのうちに、よいわざを始めてくださった神ご自身が、それを完成してくださいますように」と祈りました。

諸聖人の連願

参列者は起立し、司教もミトラを取り、立って手を合わせ、会衆に、「司祭の務めを果たすしもべに、天からのたまものを豊かに与えてくださるように祈りましょう」と招き、受階者である髙木助祭は、司教の前にひれ伏しました。

彼のために、諸聖人の助けを願う連願が朗々と歌われました。

3 人の司教から按手を受ける（左からガクタン エドガル司教、平賀徹夫司教、幸田和生司教）

按手と叙階の祈り

司教が唱える叙階の祈りは、旧約の歴史を踏まえるだけではなく、時が満ちて御子イエス・キリストを世に遣わされ、全世界に救いのわざを告げるようにお命じになりましたと、宣教の歴史を述べ、現在に及び、今、私にも必要な助け手をお与えください、司教団に加え、司教団のよい協力者となり、宣教の働きによって、み言葉が実りをもらし、心をこめて秘跡を取り行えることができますようにと祈りました。

叙階の秘跡の中心部分である３人の司教による按手、続いて参列者の司祭たち一人一人から按手を受け、司祭団に加えられました。司教や司祭たちは一人一人、万感の思いを込めて頭の上に手を置き、新司祭の上に祝福を願いました。

祭服の着衣と塗油

続いて、司祭となって初めて着られる祭服を、新司祭の召命に深くかかわりのあった高橋昌神父とマルコ・アントニオ神父から受けて身に着け、聖なる油を塗ってもらうために、司教のまえに赴き、ひざまずくと、その手に聖なる香油が塗られ、「信じる人々を聖なる者とし、感謝の祭儀をささげるために選ばれた新司祭を、キリストが守ってくださるように」との祈りがささげられました。

パンとぶどう酒を新司祭が捧げ持ち、司教の前でそれをささげ、司教は、これからの司祭生活の助けとなるように「あなたがこれから執り行うことをよくわきまえ、それにならい、主の十字架の神秘にかなう生活を送りなさい」と励ましを与えました。

司教は、新司祭を司祭団に紹介し、新しい兄弟として迎えるようにと勧めを与えました。

この後、新司祭を交え、感謝の典礼がささげられ、参列したすべての人が祝福を受け、ご聖体を拝領しました。

花束贈呈

拝領祈願が唱えられたのち、花束贈呈が行われました。拍手が鳴り響くなか、ガクタン司教、髙木新司祭、渡邉助祭の３人に花束が贈呈されました。

祝　辞

その後、養成担当者を代表して、板垣勤神父が、司祭叙階を迎えた今日が出発の日で、完成の日ではありません。イエス様が一番、神様が一番ということで生きていく人であってください、と励ましの言葉を述べ、続いて、信徒を代表して、出身教会である水沢教会の教会委員長からお祝いの言葉と４色のカズラのプレゼント目録を手渡しました。

派遣先の発表

その後、ガクタン司教様から、「髙木神父様、おめでとうございます。私たちは、髙木神父様に続く、2026 年には 11 人の司祭の誕生を待っています。ここで、髙木新司祭の派遣先を発表いたします。今年の７月に、言語を学ぶために、フィリピンのバギオにあるセント・ルイス・大学に１年間留学いたします」と派遣宣言が発表されました。

新司祭の挨拶

髙木新司祭が花束とマイクを持って、「神学校に入学した時、これから多くの人との出会いが待っていますよ、と言われたのをおぼえていますが、今日は、本当に、遠くからも叙階式にきてくださいまして、ありがとうございました。これからも人との出会いを大切にしていきたいと思っています。

ガクタン司教様、今日叙階式をしてくださり、ありがとうございました。

平賀徹夫司教様、わたしの神学校入学を許可してくださり、ありがとうございました。
幸田和生司教様、いつも温かい目で見守ってくださいまして、ありがとうございました。

私は叙階のカードに選んだ言葉は「私についてきなさい」というイエスのお言葉をイエスの足跡の絵とともに印刷しました。このイエスにずっとついて行く覚悟でおります。どうぞ、お祈りをもって支えてください」とあいさつしました。

新司祭の祝福があり、その後、荘厳なミサの派遣の祝福を受け、喜びと感謝に満ちた叙階式が終了いたしました。

ミサ後は、聖堂前で、新司祭から祝福をいただくために、ひざまずいて祈る人々の姿も見られました。

叙階式には、仙台教区内外からたくさんの侍者服を着た子どもや青年たちが参加しました

神学院の恩師マルコ神父や先輩・後輩と

ガクタン司教と

■髙木健太郎司祭から

『わたしについてきなさい』

4月29日(土･祝)、仙台教区司教座聖堂元寺小路教会にて、多くの方の暖かいまなざしの中で、司祭叙階のお恵みをいただきました。来てくださりまして、本当に感謝申し上げます。当日来られなかった方も、遠くからお祈りいただきまして、ありがとうございました。また、わたしの叙階式のために多くの会議、準備、設営をしてくださった皆様に感謝申し上げます。翌日、日曜日の主日ミサがある忙しい中、遠くから、多くの司祭が来てくださいました。後輩や同級生の神学生も来てくれました。出会えた全ての皆様に感謝です。

そして、叙階式カズラをプレゼントしてくださった4県ベトナム人青年会の皆様、4色カズラをプレゼントしてくださった水沢教会と有志の皆様、カリスをプレゼントしてくださったエメ神父様。本当にありがとうございました。

叙階式前の午前中には召命の集いが行われました。話をしてくださった皆様、司会や演奏、動画説明、すばらしい集いになりました。侍者をしてくれたみんなも、本当にありがとう！

わたしの司祭生活がスタートしました。

翌日は元寺小路教会で7時、9時、18時の初ミサでした。初ミサは人数制限がありませんでした。多くの方が来てくださりました。ありがとうございました。緊張しましたが、本当に恵みのミサでした。司式をしていて、本当に大きな喜びを感じました。小野寺神父様、ヴァレラ神父様、イグナシオ神父様、そして同級生の伊藤神父様が共同司式してくださいました。いつもの侍者の子たちに加えて、ベトナム青年たちも侍者をしてくれました。18時のミサで侍者をしてくれた子もいます。みんなありがとうね！

叙階されて3か月後、7月末からフィリピンのバギオにあるセントルイス大学（SAINT LOUIS UNIVERSITY）へ、留学の命を受けました。初めに聞いた時は驚きました。まさか自分が海外留学するとは思ってもみませんでした。神様は本当に不思議わざをなさります。「わたしについてきなさい」(マルコ1章17節)このイエス様のことばを胸に、これから司祭として歩んでいきます。

●お祝いメッセージ●

髙木神父の司祭叙階の挨拶

私は、東京カトリック神学院の霊的同伴者であるマルコ･アントニオ･マルチネス･フランコと申します。

ガクタン司教様、仙台教区の司祭団と信徒の皆さん。髙木健太郎さん司祭叙階おめでとうございます。

髙木さん、“いや、すみません”：髙木神父と初めて会ったのは、彼がカトリック神学院から宣教司牧実習のために東京大司教区の目黒教会に派遣された５年前のことです。１年間土曜日と日曜日に髙木神学生は目黒教会に来ました。わたしは主任司祭として髙木神学生と、何よりも司祭職を目指す喜びを分かち合いました。

髙木神父は社会人として公務員を長年務めました。その後、カトリックの司祭職の魅力に憧れました、そして、主イエス・キリストの呼びかけに応えて、仙台教区神学生として東京カトリック神学院に入学しました。

髙木神学生の心の中にある司祭職の使命はダイヤモンドの原石のようなものでした。その宝物が世の光として輝くために、カトリック神学院の教育で磨かなければなりませんでした。

カトリック神学院では、神学生の養成に四つの次元があります：人間的､霊的､知的､司牧的。

カトリック神学院の養成者の指示に従って、髙木神学生が司祭叙階に向かってこの四つ次元を通して、自分の心の中にあったダイヤモンドの原石を磨いていきました。長年待ちわびた日がついにやってきました。髙木健太郎さんが、ガクタン司教様の司式で司祭叙階を受けました。健太郎君が髙木神父になりました。いまは良き牧者である主イエス・キリストの姿が髙木神父の中に輝いています。

５年前に、目黒教会で初めての出会い、主任司祭と神学生との付き合いが始まりました。その後、カトリック神学院で霊的同伴として付き合いが続きました。これからも司祭同士で付き合いを続けたいと思います。

髙木神父さん、司祭叙階式で受けた司祭職の恵みの光と喜びがいつまでも心に残りますようにお祈りいたします。

全て神に感謝。アーメン

マルコ･アントニオ･マルチネス･フランコ

（グアダルペ宣教会）

祝　司祭叙階・髙木健太郎神父様！

去る５月 14 日（日）髙木新司祭の初ミサが、出身教会である水沢教会で行われました。

この日には、水沢地区新担当のマルコ・アントニオ・デラ・ロサ神父と、旧担当の私、高橋が脇につき、ミサがささげられました。立派な初ミサでした。

さて、この初ミサを受け、髙木師との出会いなどが、よみがえってきました。

髙木師は、岩手県職員として勤め、県内をまわっていました。その間、「人が生きるには､信仰が大切だ」と知り、東京の高円寺教会の吉池神父様のもとに通い、ミカエルの霊名で受洗しました。その後、奥州市水沢にある岩手県南広域振興局に入り、水沢教会所属となりました。ミサでは侍者を務め、私が、第４地区内の教会へ出かけるける時は、車を運転してくれました。運転はとても慎重で、安心して乗ることができました。

各教会へ寄ると、その教会の雰囲気を敏感に感じとり、また、信者の様子も、よく理解していました。

髙木師は、信徒の時、私にこう言いました。「仙台教区には教区司祭が少ない。私が司祭になって働きたい」と。これを聞いた私は、髙木さんの神学校入学の希望を、仙台教区に伝えました。その年の「春の後藤寿庵祭」に平賀徹夫司教様がおいでくださり、髙木さんの面接もできました。

翌 2017 年、神学校に入学し、勉強と修業に励み、晴れて､今年４月 29 日､司祭叙階式を迎えました。水沢教会では、毎週共同祈願で髙木師のよき司祭となることを祈っていますが、これからもよき司祭として働き続けることを祈り続けます。各教会でも、仙台教区に教区司祭が増えるように祈りましょう。髙木師は、知人に神学校入学を呼びかけています。仙台教区に神学生が増えますように、呼びかけをし、祈りましょう。

前 水沢教会担当、現 仙台教区協力司祭

高橋　昌神父

お祝いの言葉

髙木健太郎神父様

喜びのうちに、司祭叙階おめでとうございますと申しあげます。

神父様とベトナムの青年たちとの関わりが、どんなに重要で大切かと言いますと、毎週日曜日のミサ後、小聖堂で主の祈り、アヴェ･マリアの祈りを一緒に唱え、最後に祝福をベトナム語でしてくださったのにはビックリするほどでした。「ベトナム語ができる神父だ」と、驚きと喜びと感謝でとてもとてもうれしくなりました。ベトナムの青年たちともコミュニケーションが取れ、みんなと仲良く会話できることが何よりうれしいです。叙階式の前に召命の集いが行なわれ、その時青年の何人かが「主よ！あなたは、私を呼ばれます」と自分の召命を考える時期だ……と感じたそうです。今まで考えたことなどなく、身にしみたそうです。これからも、みんなに色々な事を教えてください。そして、仙台の司祭としての召命と私たちシスターの召命が、豊かで価値のあるものとして生きることができるように、心よりお祈りしたいと思います。神父様、これからもベトナムの青年たちとたくさんの人々を導き、良い牧者でありますように。司祭になられた事を、喜びのうちに。

Sr. マイ（善き牧者の愛徳聖母修道会）

合同キャンプでのエピソード

髙木神父さん、叙階おめでとうございます。

コロナ禍前、2017 年 2018 年に当時神学生だった髙木神父さんに夏の合同キャンプのお手伝いをしていただきました。子どものキャンプは初めてとのことでしたが、実際には目配り、親しみやすさ、その場で考えて動ける等何も心配することはありませんでした。

一番の思い出は、雨で外遊びができず、ドミニコの家の部屋を使ってスタンプラリーをしたことです。髙木神学生が考えたコーナーは「お相撲」でした！力を発散できない子どもたちは容赦なく髙木神学生にかかっていき、最後は転がされて大喜びでした。その思い出はきっと強烈に残っていると思います。

ご一緒してからリーダーたちは、叙階の日をずっと待っていました。叙階式当日は子どもたちが目を丸くして司祭誕生を見守りましたよ。お相撲のように、子どもたちや若者に向き合える髙木神父さんの誕生、万歳！

佐々木 いづみ（八木山教会）

髙木健太郎神父さま、あらためて司祭叙階おめでとうございます。

私は2019 年から2022 年まで、東京の秋津教会で髙木神父さまと教会学校の運営に関わりました。コロナ禍が重なり、ミサや活動ができない苦しい時期でしたが、髙木神父さまは優しく、温かく子どもたちを見守ってくださいました。

教会学校では要理教育をお願いし、ミサや神様のことを伝えていただきました。子どもの素朴な疑問にも、丁寧に答える姿が印象に残っています。感染状況に気を配りつつ、遠足やミニキャンプなども企画しました。普段は物静かで“超まじめ”なイメージの髙木神父さまですが、外遊びを思いっきり楽しんだり、悪役に扮しノリノリで動画に出演したり・・・。いつも子どもたちは大喜びでした。(有り余る若いパワーに圧倒され、常に筋肉痛と戦っておられたことは秘密にしておきます笑)

３年間、ありがとうございました。これからのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

本間 優大（東京教区秋津教会）

髙木神父様、司祭叙階おめでとうございます

神学校１年の夏休み研修で野田町教会に初めて来られ、餃子パーティで歓迎したのが昨日のことのようです。皆、久しぶりの神学生がうれしくて質問責めにし、それに率直に答えてくださってとても楽しく過ごしましたね。当時の髙木神学生の印象はいわゆる「普通の青年」。それが次に研修に来られた時、いい意味ですごく変わってました。それは「纏 (まと) う雰囲気」。多くの神父様のそれに近づいているという驚き。と同時に神様がその姿を示して下さっているんだなぁと…。

その後何度か研修に来られ、エメ神父様とご一緒に病者訪問、松木町教会の台帳整備、墓地清掃、大型家具の搬入、コロナ禍の復活祭ミサ映写準備等、教会の日常や力仕事も助けてくださいました。細部に気づき、さり気なく手助けしてくださった姿に今も感謝。

今夏からのフィリピン留学、元気にいってらっしゃい。

髙木神父様がいつも神様の愛に包まれ、守られますようにこれからも祈っています。

渡邉 祐子（野田町教会）

仙台教区「召命の集い」in 仙台

4月29日(土･祝)、髙木健太郎助祭の司祭叙階式に先立ち、仙台教区各地の小学生から青年までの有志が元寺小路大聖堂に集まり、「召命の集い」が行われました。

ガクタン エドガル司教は、挨拶の中で「例外なく一人一人に召命が与えられます。私たちを育ててくださったお父さんお母さんの召命。私たちにイエス･キリストのことを教えてくださった神父様やリーダーの召命。私たちはいろいろな人のおかげで神様の愛を体験します。私たちもどのようにこの同じ神様の愛を伝えたら良いか共に考えましょう」と呼びかけられました。

集いは、ジュリ･フェクトさんとSr.オディールさんと一緒に「アーメン・ハレルヤ」の歌を合唱することから始まりました。

最初に元寺小路教会の荒賀久仁夫さんから「仙台教区の殉教者」の映像と解説を聞き、先人の信仰について学びました。

続いて「イエスの弟子たち」として６人の先輩たちが召命について話をしました。

堀江節郎神父はイエス様との出会いと海外での宣教について、ポール・トー神父からは故郷ケニアでの体験から宣教会へ入会したことが話されました。シスター稲江佐和子さんは、海外生活の後、東日本大震災のためにカリタスジャパンから派遣されたことから修道会に入会したこと、フランス人のミュレル・シルヴィーさんは「心の港」という共同体でのボランティア活動での体験を話しました。ベトナムから技能実習生として来日しているグエン・ディン・クアンさんは八戸教会でのベトナム語のミサがきっかけで、仙台教区の司祭になることを目指すことを話しました。最後に登場した司祭叙階間近の髙木健太郎助祭は、司祭を目指すきっかけが神父様を手伝う事からだったと話し、イエス様の近くで奉仕する一番の手伝いは、神父やシスターになることだと話してくださいました。

この後、参加者は侍者服に着替え、髙木健太郎司祭叙階式に参加しました。初めて見る叙階式に喜びがあふれ、心に残る集いとなりました。

関　毅（教区広報委員）

司教叙階１周年記念ミサ

「四旬節第４主日に当たる３月19日は、ちょうど１年前の３月19日、仙台教区が待ちに待ったガクタン エドガル司教様の叙階式が、このカテドラルにおいて執り行われました。そして、この１年、司教様と喜びを共にして歩んできました。

皆さんもご覧のように、この度、司教座が祭壇の左側に移され、きちんと整えられました。これからも、司教様と共にミサをささげながら、励まし、喜びと希望の心をいただきたいと思います」、とまず小野寺洋一神父が挨拶のことばを述べ、ガクタン司教と共にミサをささげる淳心会のアルマンド神父と髙木健太郎助祭が紹介されました。

この日は、同時に、洗礼志願者の「清めと照らし」の典礼と、教会学校の６年生の卒業式が合わせて行われました。

説教の後、洗礼志願者の典礼が行われ、ミサの終わりに、日曜学校の卒業生２人に終了証書が司教から手渡されました。

最後に、司教が、以下のように感謝の言葉と決意の言葉を表明して終わりました。

「私は、心も思いも尽くして皆さまと一緒にこの奉仕の道を歩んでいきたいと思います。特に、兄弟司祭たちと月例会や司祭評議会といった司祭の集会を通して十分話し合い、私たちに求められる行動を共に識別していきたいです。

今日、卒業した子どもたち！　今日の第１朗読にダビデという子が登場し、サムエルが彼に油を注ぎました。その意味は、ダビデが後、王となることです。皆さんも洗礼を受けた時、油を注がれました。神様はあなたたちもダビデの様に信頼し、あなたたちの成長を見守っています。司教の杖があります。これは、羊飼いの杖です。ダビデは羊飼いでした。ダビデは、今日の詩篇の言葉を書いたと言われています。『主はわれらの牧者、私はとぼしいことがない』とありました。神様は羊飼いのように、私たちを導き守ってくださるのです。今日の詩篇23篇の言葉を信じて、歩んでいきましょう」。

司教叙階・着座の１周年記念ミサということで、いつもより多くの信徒が参加しており、司教の言葉にうなずきながら、熱心にお話を聞く姿は、心を合わせてこれからも共に歩んでいくことを表しているようでした。

Sr. 長谷川 昌子（教区広報委員）

特集
それぞれの
新しい創造

カリタスみちのくの集い

３月18日（土）、「カリタスみちのくの集い」がカリタス石巻ベースを会場に開催されました。「カリタスみちのく」は、日本のカトリック教会がオールジャパンの体制で、東日本大震災の被災地に作った８つのベース（ボランティアの拠点）のスタッフ有志が、震災から10年の節目に、それまでの絆の継続と情報交換や研修、そして今後の災害に対応することを目的に設立した団体です。今回は、「感謝、そしてこれから」と題し、初代石巻ベース長だった、現在札幌教区の佐久間力神父様をお招きして、震災直後に石巻ベースを立ち上げて支援活動を始めた体験談をお聞きし、今後の災害に生かしていこうと開催され、オンライン配信もされました。これからも、被災地支援を続ける各種団体・教会・グループ・

個人の方々の情報共有・情報発信の場としていきたいと思っています。年に２回のニュースレターの発行も行なっています。興味のある方は「カリタスみちのく」と検索して、Facebookページをご覧ください。

カリタスみちのく世話人会代表
カリタス大船渡ベース ベース長　菅原 圭一

それぞれの新しい創造 原稿募集

仙台教区では、平賀司教が打ち出した「新しい創造基本計画」を実践していく中で、さまざまな形で「新しい創造」を経験したはずです。今、もう一度この11年間を振り返りながら、「新しい創造」とは何かと考えることは十分に意味がある事と考えます。仙台教区広報委員会では、皆様方が感じたそれぞれの「新しい創造」についての投稿を募集いたします。

仙台教区のうごき

第４回仙台司教区広報委員・地区広報委員総会

仙台司教区広報委員・地区広報委員総会が、３月21日(火･祝)、ガクタン司教、広報委員６人、地区広報委員８人が一堂に集まり、元寺小路教会で３年ぶりに開催されました。

ガクタン司教が第２バチカン公会議の「広報機関に関する教令」に触れながら、福音宣教にとっての広報の大切さを強調された後、各委員による活発な意見が交換されました。

新地区体制の地区広報委員の配置について検討の結果、総会に出席する地区広報委員を各地区１人とし、その下にそれを補助する複数の広報担当者を何人かおきネットワークを構築することなどが検討されました。また、教区報の内容をさらに豊かにするために、各小教区の教会報などを、広報委員会に送付していただく事も要請されました。

昨年までの教区報の内容について、おおよそ以下のような意見が出されました。すなわち、・さまざまの方の投稿があり興味深いので投稿者のすそ野を広げると良い　・「カリタスみちのく」の記事が載っていない　・ニュースが遅くなるので発行を増やしたらどうか　・お年寄りにとって多少遅くとも紙媒体はありがたい　・昔に比べると読みやすくなったし写真が多いのが嬉しい　・大きな行事だけではなく小さな活動もこまめに発信する必要がある　などの意見が出されました。

そして、次号の発行予定は８月でしたが、今年は17年ぶりに司祭叙階式があるので、特集を組んで６月に発行することを前向きに検討することが確認されました。

上野 隆（教区広報委員）

各地区からのお便り

第１地区より

〈浪打教会〉ご復活おめでとうございます

今年は、２年ぶりに、聖週間を皆でお祝いすることができました。

４月６日聖木曜日から８日聖土曜日までの３日間の典礼は、李神父の司式により、浪打教会において、本町教会の皆さまとともに行いました。

４月２日受難(枝)の主日から９日復活の主日まで、李神父の導きのもと、典礼部、聖歌隊、朗読奉仕者、男性部、女性部をはじめ、教会の皆さまの奉仕とご協力によって、賛美と感謝の祈りをともにささげ、祝会で分かち合い、喜びと感動をいただきました。

また、４月16日復活節第２主日、神のいつくしみの主日には板垣神父の司式により、本町教会と合同でミサを捧ささげました。板垣神父さまには、この２年間、ミサの司式、臨時の聖体奉仕者養成研修会など、暑い夏も大雪の冬も、弘前から何度もお運びいただき、教え導いてくださいました。感謝にたえません。どうかこれからもお元気で仙台教区のわたしたちをお導きくださいますようお祈り申しあげます。ありがとうございました。　　松田 大（浪打教会）

第４地区より

〈3月26日：四旬節第５主日ミサ〉

元寺小路教会では、この日、ミサ後にカトリック正義と平和仙台協議会主催の講演会があり、名古屋教区長　松浦悟郎司教様が来られミサをささげてくださいました。主司式は、松浦司教で、共にガクタン エドガル司教、小野寺洋一神父、佐々木博神父がミサをささげました。

まず、松浦司教は、四旬節の第３、４、５主日の福音ではヨハネ福音書が読まれてきました、と説教が始まりました。私は、ヨハネ福音書には、根本的視点があると思います。それは何かと言えば、ヨハネの手紙の１の最初に書かれている「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます」ということです。

ヨハネは、驚きをもって「神が人となられた」ということをイエスと共に過ごす間に、聞き、目で見、触れたことを、私たちに書いてくださったのです。これは、大きなテーマです。神が人間になられるということは、人間の感情、心の揺れなどを感じられたということです。私は子どもの時、イエスを冷静な方だと思っていました。しかし、聖書を読むと、人間になられたということは、心が揺れ動いていたということがよく分かります。ゲッセマネの園で、イエスはひどく恐れてもだえ始め、地面にひれ伏して苦しみ祈られたと書かれています。神に「恐ろしいのです」と言われ、弟子たちには「祈ってくれ」と頼まれたのです。イエスはこういう人です。

人間の体を持つ限界は、私が今仙台にいれば、名古屋にはいられないのです。シリアにいるドクターが、何百人という人に「助けてくれ」と叫ばれています。医者は、その人々を助けるためには、今、自分が食事をし、何時間か休みを取らなければ、助け続けることができないのです。そのような苦しみを、イエスは感じられたのです。

イエスが人となられたことは、すばらしいことです。ラザロの復活を見ると、イエスは涙を流し、激しく心を動かされました。ヘブライ書の５章を読んでください。「キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら～」私たちのために御父に執り成しをしてくださったのです。私たち一人一人のために涙を流し、いのちへと呼び戻そうとされたのです。

第１朗読で読まれたエゼキエルの預言は、死者を墓から引き出すことが読まれました。これは、ラザロの復活の意味です。

1995年、私はあの１月17日、神戸におりました。翌日からボランティアの方々と一緒に活動に出ていました。夜は、参加者の皆さんと分かち合いをしていました。ある参加者の言葉を忘れることができません。「何年も、私は家に閉じこもっていました。部屋も雨戸も締めたままでした。あの地震で、このままだったら私はダメだ。外に出なければ、と思って神戸に来ました」と言ってくださいました。ラザロは、墓に閉じ込められていました。お墓の石がのけられて、戸が開かれました。ラザロには、いろいろなざわめきが聞こえてきました。その中のイエスの声も聞こえてきました。「ラザロ、出てきなさい」。

全人類に「出てきなさい」という声が聞こえます。その声が届きます。富と権力を持ち、人のことに平気な人は、墓の中で朽ちていくのです。イエスはおっしゃいます。「石をのけなさい」と。光が入り、声が聞こえます。風が吹きます。私たちは、石を取り除けなければなりません。石を取り除けることができるのです。私たちは、命に向かって生き始めてほしいと、願うばかりです。主は「石をどけなさい」とおっしゃっているのです。これが、四旬節です。

そのあと、ガクタン司教様が英語とタガログ語で、松浦司教様のお説教のポイントを訳してくださいました。

第５地区より

2023 年度　第７地区大会開催

５月から、新しい地区制に移る前の2023 年４月22日(土)に福島市のカトリック野田町教会において、2023年度 第７地区大会が開催されました。

テーマ「ともに歩む」 ―交わり、参加、そして、宣教― というプログラムに沿って、講師として、幸田和生司教、ミサ司式は、ガクタン エドガル司教、そして４月 29 日に司祭叙階式を迎える髙木健太郎助祭も参加くださり、第７地区として最後の地区大会を実施することができました。

幸田司教の講話「シノドス 2021－24」では、フランシスコ教皇が 2021 年秋に 2023年まで行われる「シノドス第 16回通常総会」の開会を宣言し、全世界のカトリック信者に、この歩みに参加するよう呼びかけた事に始まり、シノドスとは「ともに歩む」という意味を分かりやすく説明され、ともに歩むことが教会の本質だと話されました。

12年前の東日本大震災では、共に歩み、希望と展望を育んでいくキリスト者の歩みがあり、これは、仙台教区だけのことではなく、日本の教会全体がシノドス的に歩んできたという成井大介司教のお話を引用されながら話され、被災地である東北地方で暮らす私たちは、実感として受けとめる事ができました。

その後の小教区からの発言と分かち合いは、具体的に私たちの意見を聞くための10の質問票の中から①旅の同伴者とは⑥教会と社会における対話⑦他のキリスト教諸派とともに　の３つにテーマを絞って話し合われました。

コロナ禍での助け合いや、信者以外の人々にも開かれた教会、プロテスタント教会の人々との共同の行事参加、若者からの声等、それぞれの教会からの発言が多くありました。

この後、司教ミサでは、ガクタン司教から 21 人の方々への「臨時の聖体奉仕者」任命式が行われました。

第８地区からの参加も数名あり、全体として 74人の参加者がフランシスコ教皇の呼びかけに、新しい風となって、「ともに歩む」とは何かを考えさせられた大会でした。

駒田 瑞穂（松木町教会）

郡山教会の新しいオルガン

４月30日(日)、郡山教会で新しいオルガンの祝別式とお披露目会がありました。

それまで 25 年使っていたオルガンの寿命が尽きたと判断されたためです。オルガニストによると音量が小さくなって聖堂後方まで音楽が届かなかったり、音程が狂っていたり、基盤も老朽化するなど度々不具合を起こしていたそうです。一般の信徒がそうしたことに気づかなかったのは、オルガニストがオルガンを「だまし、だまし」弾いていたからなのだそうです。

新しいオルガンは６月納入の予定でしたが、幸運にも４月25日に私たちの元に届きました。さっそく、30日に祝別式とお披露目会を開きました。３人のオルガニスト(向山良作、橋本亮二、菊池章代)による演奏（バッハ、パッヘルベル、典礼聖歌）と、鈴木美智子のソプラノ独唱によるミニコンサートとなりました。目を閉じればパイプオルガンかと聞き違えるようなクリアな音色と響きにしばし酔いしれました。最後は全員で「よろこびうたえアレルヤ」を歌いました。
[写真は鈴木美智子と橋本亮二]

小湊 博子 (郡山教会)

教区の諸活動

カトリック正義と平和仙台協議会　第10回「いのち勉強会」

3月26日（日）元寺小路教会

「平和を実現していくことの大切さ」

～平和は大河のように　正義は海のように～

講師：名古屋教区長　松浦悟郎司教

講演会の前に、仙台教区ガクタン　エドガル司教が、松浦悟郎司教を歓迎しました。

ガクタン司教は、1997年から約３年、大阪堺教会で、松浦司教と司祭同士として共同宣教司牧をしていたことに言及し、講演会を平和の実現に出ていく私たちへの派遣の言葉として受け止めたい、と挨拶しました。

〈講演〉

ロシアがウクライナに侵攻して戦争が始まりました。この戦争を見て、その背後で起こっていることが見えてきて、大変なことになったと思うでしょう。今世界は２つに分かれてしまいました。非常に危険な状態になっています。

これまで、国際社会は戦争をしなくてもよいように、何とかルールを作ろうということでやってきました。第一次世界大戦の後では国際連盟ができました。しかし、すぐこれが機能しなくなり、第二次世界大戦が起きました。その後、国際連合ができました。

科学技術は、その粋を極めて、人類の人権を守るために使われるべきですが、今はどうでしょうか。科学の粋を極めて、戦争に有利な武器を、安価に作ろうとしています。第二次世界大戦は、大量殺人を犯しました。この状況に対して、国際法が作られました。ジュネーブ条約では、市民を攻撃してはならない、捕虜を殺してはならない、ということが決められました。しかし、今では、捕虜も市民も殺され、歯止めが利かない状況です。20世紀のときになされた努力が、壊れつつあるのです。

しかし、国連では、何があっても、アメリカもロシアも中国も、いろいろな国も何とか今はまだ話し合いをしようと、その席にはついています。これは大切にされなければなりません。

今回の戦争で、ロシアが100％悪いと思います。しかし、なぜこのようなことになったのか。責任はロシアだけにあるのか、これを反省しなければなりません。

戦争は、その直前のことがあったので、起こったのではありません。長い長いプロセスがあり、戦いが始まるのです。

毎日新聞に「9.11から11.9へ」というコラムがありました。9.11は、皆様ご存じの同時多発テロが起きた日です。これが起きたことによって、当時のアメリカ大統領のブッシュは、テロの戦争に入りました。

松浦悟郎司教

11.９は、ベルリンの壁が壊されたときです。これによって、東西の壁は壊れましたが、南北の壁は壊れませんでした。とてつもなく豊かな国と、人々と、虐げられた貧しい人。国境は、地理的ではなく、グローバル化して、グローバル・サウスとグローバル・ノースという言葉を使うようになりました。

東西の壁が崩れた時、自由主義の勝利だと言われました。しかし、それによって、貧しい人々が生まれました。今は、豊かさと貧しさがなくなり、富が平等になれば、問題は解決します。テロという言葉もふさわしくなかったのです。11.９の意味をどう捉えたかによっては、問題が起こらなかったでしょう。11.９によって、ヨーロッパは軍縮が進みました。フランシスコ教皇は、軍需産業を批判しています。軍需産業では、戦争の道具を作っているのですから、それを使わなければなりません。それをどこで使うのでしょうか。そのためには、どこかで、戦争をしなければならないのです。

ウクライナとロシアの戦争によって、軍縮が進んでいたヨーロッパ諸国が、軍備拡張に走っています。これも大きな問題です。

もう一つ、世界を大きく変えたことがありました。トランプ大統領が立ち、「アメリカ・ファースト」と言ったことです。オンリーワンには２つの意味があります。１つは、あなたはかけがえのない人ですよ、という意味と、トランプの言うオンリーワンは、「俺だけ」という意味です。

ファーストは、地元にとって利益があると考えますが、ファーストの怖さがあります。はじめは、みな私が、その中に入っていると思っています。しかし、国民のためと言いながら、ファーストのグループに入るのは、1部の人だけになっていきます。そして、最後に選ばれるのは、結局１人のファーストのみです。独裁者に集中していくのです。

日本でもそうでした。沖縄のガマの事ですが、ガマの一番入り口には、朝鮮半島から連れてこられた人々、その次は沖縄の人々、その後ろに兵隊たち。一番後ろに将校がいました。国体を守るためということでした。終戦前でしたが、長野県の松代に地下壕が掘られました。天皇と軍隊の中枢が入るためでした。天皇を守ることが、日本を守るためだったのです。

アメリカがファーストと言ったとき、アメリカとイランが核の廃棄を約束していていたのですが、アメリカが一方的にそれを破棄しました。イスラエルとの関係で、アメリカはその条約を破棄したのですが、イランがそれを守らないということで、制裁が行われ、それに対してイランは、アメリカに対立し核を作ることになってしまいました。

戦争は、徐々に戦争になっていくのです。教皇が「戦争が、橋を壊すのではない。それよりも、橋が壊れたところに戦争が起こる」ということをおっしゃいましたが、橋が壊されると、交流が途絶え、お互いの理解が生まれなくなるのです。橋が壊れている時が要注意です。

戦争までに、100 のステップがあるとすれば、98の段階で止めようとしても止まりません。一度動き出すと、止めるのは難しいのです。そのことが分かっている人は、100 のステップの最初の段階で、戦争を止めることができるのです。第１のステップ――両国の関係が壊れること。思想の中にファーストの思想が入ってきたとき、和解していないことは危険なことです。

私たちは、「平和」と言いますが、その前に、何ができるか、何をしなければならないかを考えなければなりません。今、一番大きなことは、日本が安全ならいい、という考え方です。日本に平和についての核心がありません。平和を作ること、平和のために生きていくことがありません。

今大変危機的状況にあります。憲法の中に、「国防」や「自衛隊」という言葉が一つでも入れば、戦争は行われるようになるのです。自民党が作った案には、「公共の福祉」という言葉が「公の秩序」に改変されようとしていますが、このように変えられると、公の秩序に反するということの判断は政府がするということですから、大変なことになるのです。

今は、憲法がありますから、何とか守ることができているのです。ですから、憲法を変えようという動きをぜひ阻止しなければなりません。「ピース９の会」は、そのメンバー一人一人が、国民の意思表示の際に、私は絶対、憲法を変えたくないということに署名するということで、始まりました。３人が１つのグループになりますが、１人でもかまいません。ぜひ、ご賛同ください。

この後、活発な質疑応答が行われ、ピース９の会について、など、いろいろな質疑がありました。今回の講演会は、大勢の参加者がありました。

第10回（2023）いのちの光３･15 フクシマ
「フクシマが背負ってきたもの 伝えつづけるもの」

主催：「いのちの光３・15 フクシマ」実行委員会
後援：カトリック仙台司教区
協賛：日本基督教団東北教区放射能問題支援対策室　いずみ
日本カトリック正義と平和協議会
カトリック正義と平和仙台協議会

ミサと現地の声：
3月15日（水）原町教会

第10回「いのちの光 3･15 フクシマ」を終えて

「いのちの光 3･15 フクシマ」の小さな歩みも、10 回目を終えることができましたことを感慨深い思いで振り返っています。それは多くの方方からいただいた暖かな励ましの結実だと、深く感謝をしているところでもあります。

新型コロナのまん延で、ここ２～３年はやむを得ず中止（1 回）にしたり、入場者の制限等変則的な開催で集いを続けてきました。しかし今年、第10回目の３月15日のミサでは、思いがけず原町教会の聖堂が 50 人を超える参加者で満たされ、胸が熱くなる思いがしました。

主司式を予定していたガクタン・エドガル司教が都合により欠席のため幸田和生司教、イグナシオ・マルティネス神父の共同司式で行われました。幸田司教の見事な司式にて、ミサは粛々と執り行われたことをご報告いたします。説教は、イグナシオ・マルティネス神父が代理を果たしました。また会場には、遠く美濃加茂教会（岐阜県）から狩浦正義神父、仙台から佐々木博神父がおいでになり、力をいただきました。

現地報告は、志賀勝明さんが放射能被害の現状と国や東電の対処について訴えられました。参加のみな様に前に進むための新たな思いを抱かせてくれたことを確信しています。

〈ミサと説教〉

政府の原発再稼働・新設の方向転換の中、私たちは「フクシマ」の原発事故を改めて心に刻み、未来に続く「いのち」のためにミサをささげましょうと、幸田司教の呼びかけでミサが始まりました。

続いてイグナシオ神父の説教です。本日私は「巡礼者として」ここ原町まで電車で揺られてきました。ここにおられるみな様も、この聖なる地に、旅するキリスト者として･被災者として･連帯者として集まってきたことと思います。「苦しみのあるところに必ず神はいる」「苦しみのあるところが聖なる場所」私たちは信仰者として、希望を持ってここにきています。

今日の福音朗読は、マルコの“からし種”の箇所です。種はいのちの始まりです。この聖なる地で多くの人が亡くなりました。しかし、そのいのちは、神の国の実現となり始まり生きる

のです。ここには他にはない「主イエスの愛」があります。大きなことはできませんが、私たちは、この現実の場に小さな種をまくように神に呼ばれています。前向きに、希望を持って歩んでいきましょう。

〈志賀勝明さんの現地報告〉
～放射能汚染水について～

私は専門家ではありません。若いころは、カレイ･ヒラメ･秋サケなどを採っておりましたが、その後ホッキ貝漁を主にしていました。12 年前の原発事故について、海で生きてきたものとして、海から学んだことを話したいと思います。

原発事故後 12 年もたっているのに、山は全く除染されていません。このことは海に重大な影響を与えます。請戸川(浪江)ばかりでなく、新田川(南相馬)･真野川(鹿島)･宇田川(相馬)･阿武隈川(宮城)から海に流れ出た水は、どんな影響が出るかということをぜひ調査してほしいと思っているのです。海の水は毎日動いています。請戸川の沖合３～４キロメートルは放射線量が高いのです。今でも海岸から10キロメートル以内は漁を自粛するように言われています。2021年には､新地漁港でクロソイという魚から放射能の高い数値が出たことはニュースにもなりました(2023年度から調査を始めるかもしれない)。

政府は、汚染水の海洋放出について「丁寧な説明をして理解してもらう」と言っていますが、丁寧な説明をされても危険なものは危険であるのです。

今私が深刻に思っていることは、メディアの報道が何かに忖度しているように映るのが、とても心配なことです。それから、未来のことを考えると教育です。大事なことがスポイル（駄目にする）されているように感じています。どんなに小さな声でも大切なことは出し続けなければならないと痛感しています。

第 10 回「いのちの光３･15 フクシマ」
実行委員 代表　勝治 美喜子（原町教会）

講演会：
3月18日（土）元寺小路教会大聖堂

初回から「フクシマが背負ってきたもの伝えつづけるもの」をテーマに掲げています。

東日本大震災で甚大な被害をもたらした東京電力福島第一原発事故から 12 年になります。この時間の流れとともに原発事故から現在の状況については残念ながら人々の関心が薄れてきています。

こうした現状を知ってもらいたいと願い今年も開催しました。

カトリック仙台教区長ガクタン　エドガル司教が「一人の人間として、皆さまと一緒に腰を据えて現地の報告を聞きたいと思う。一緒に理解し取れる行動があればそれをしたいと思う」との心強い挨拶がありました。

今野寿美雄さん

舘脇章宏さん

講師に今野寿美雄さん(元原発労働者･子ども脱被ばく裁判原告代表）聞き手に舘脇章宏さん（みやぎ脱原発･風の会事務局長）をカトリック元寺小路教会大聖堂にお迎えしお話しを伺いました。

舘脇さんが初めに3.11前の今野さんの仕事について、3.11 当時、女川原発で仕事中に被災した時の状況、その後について聞いてくださり、それに答える形で話が進みました。

今野さんは 3.11以前、福島原発はじめ、さまざまな原発・コンビナート・火力発電所などの放射線作業技術者として従事していました。

3.11当時は女川原発出張中で、水平線から白い波が近づき小島を飲み込みながらどんどん大きくなり、山腹の自動車は跳ね上がり、発電所敷地内の地割れや液状化現象などを目の当たりにしてこの世の地獄かと思ったそうです。15日に、寸断された交通網をたどり故郷浪江町の自宅に向かうが、浪江町は封鎖されていました。家族は全員茨城に避難していたことが分かったので、タクシーと新幹線を乗り継ぎようやく家族と再会できたそうです。5 歳の息子が走り寄り｢パパ、足がついてるよ生きてた！｣と叫んだそうです。小さな体でパパに抱かれたであろう当時を想像し胸が痛む思いで話を聞きました。

原発の事故については、ニュースで水位が低下していることを知り、自分の経験からメルトダウンの危険を察知し一刻も早く家族に連絡を取ろうとしたが、なかなかとれないもどかしさを感じながらの帰還でした。家族が最初に避難させられたのは浪江町の津島地区で、そこで無用な被爆をしたかもしれないと思いました。白い防護服を着てマスクを付けた人が「何でここにいるのか？すぐに逃げろ」と言ったそうです。15日の朝、全町避難となったことはテレビで知り、それ以外での情報は得るすべもなかったそうです。今週13日に亡くなった伯父は今野さんのご家族と一緒に避難していた方です。病名が急性白血病で、悔しいことにこれは被爆との因果関係は証明できません。これが被爆の恐ろしさです。

この10年の間に、私の親戚や近所の方がさまざまな病気により50代で亡くなられています。

甲状腺癌の子どもさんもいますが、「甲状腺癌にしろ、白血病にしろ、被爆の影響がなくて何があるんだ！」と怒りを込めて言われました。

また、「子ども脱被ばく裁判」原告代表になったいきさつについても話されました。

「子ども人権裁判」とは、義務教育に通っている子どもが安全に教育を受ける権利を確認する裁判です。

親子裁判は震災当時、福島県内に住んでいた親子が国や県の無策な対応のために無用な被爆をさせられたことに対して慰謝料を請求する裁判です。「子ども人権裁判」のほうは２月１日に仙台高裁で認められず、最後に残った２人の原告も今年の３月に中学を卒業して原告がいなくなり裁判は終了しました。

親子裁判はこれからも続きますが、最高裁まで行ってみようかと思っているそうです。

勝つ見込みは少ないが、最高裁まで行けば、国、県、東電の誰も責任を取らない姿が世の中の人に知ってもらえるのではないかと考えているそうです。

福島の事故は過去の事ではなく、12年前からずっと続いていて現在進行中です。今も毎月何人もの被害者の方が亡くなっていることを忘れないでほしいと、参加者に訴えかけ私の心にも強く響きました。

舘脇さんからは、女川原発再稼働に向かう状況を少しお話しいただきました。

協賛の「いずみ」事務局長服部賢治さんからも短いメッセージがありました。その中に、子どもたちは未来であり私たちの宝です。幸せは自分の家族や小さい範囲だけでは足りないと思います。今日の話を自分に引き寄せ、自分ならどんなふうに関われるか、感じたり考えたりしてほしい。宗教者、非宗教者、教派をこえてつながり小さな力でも一緒に考えてもらえればうれしいですと話されました。

お話しされた方たちがそれぞれ抱く思いを伝えきれません。

そして雨の中ご参加いただいた皆さまにも感謝の気持ちを伝えたいです。ありがとうございました。

カトリック正義と平和仙台協議会代表
木元 範子（実行委員）

編集後記

新司祭も誕生し、５月から新地区体制となりました。広報委員会では、教区報をより豊かにするべく知恵をしぼっております。そのためには、皆さまのお力がぜひ必要です。

投稿は随時受け付けていますので、下記のメール宛てに添付ファイルでお送りください。また、メールをお使いでない場合は教区事務所宛てに、手紙でお送りいただいても結構です。（上野 隆）

sendaikyoukuho@gmail.com　**次号発行予定日：９月24日(日)　原稿締め切り：７月末日**